

案内世界の文学

Le monde de la littérature

渡辺京二 著

日本エディタースクール出版部

- 1 自分にひそむかたよりの感覚 トーマス・マン トニオ・クレーゲル
- 2 家族に対するわたかまり カフカ 変身
- 3 人間の金銭欲のすさまじさ バルザック 従兄ポンス
- 4 情熱によって行動する人間のけだかさ スタンダール ノパレムの僧院
- 5 歴史を巨大な日常として トルストイ 戦争と平和
- 6 神を見失った現代人の運命 ドストエフスキー 罪と罰
- 7 結婚へのリアルな観察 オースティン 自負と偏見
- 8 男女の永遠のたたかい ロレンス 息子と恋人
- 9 見知らぬ世界への渇き トマス・ウルフ 天使よ故郷を見よ
- 10 過去に呪縛された人びと フォークナー 響きと怒り
- 1 狂気のかたちをとった理想 セルバンテス ドン・キホ

案内世界の文学

渡辺京二著

日本エディタースクール出版部

渡辺京二 (わたなべきょうじ)

1930年京都市に生まれる。法政大学社会学部卒。評論家。主な著書に『小さきものの死』『神風連とその時代』『地方という鏡』(いずれも葦書房)，『評伝 宮崎滔天』(大和書房)。また『北一輝』(朝日新聞社)で毎日出版文化賞を受賞。

案内世界の文学

一九八二年七月十日 第一刷発行

定価 一三〇〇円

著者 渡辺京二

発行者 吉田公彦

発行所 日本エディタースクール出版部

〒一六二 東京都新宿区市ケ谷田町一―六

電話(〇三)二六〇五八九一(代)

(〇三)二六七四九五二(直)

◎ 渡辺京二 一九八二年

精興社印刷・松岳社製本
カバー／サンワ印刷紙工

この本は娘 R への手紙のかたちで
現代の若い読者のために書いた
世界の文学への一つの案内である

目次

I

1	トーマス・マン『トニオ・クレーゲル』……………	三
---	-------------------------	---

自分にひそむかたよりの感覚

なぜ手紙を書くか トニオ少年の宿命 芸術家としての自覚 文学と
の出会いということ

2	カフカ『変身』……………	三
---	--------------	---

家族に対するわだかまり

二十世紀文学の先達 リアルな家庭小説 自分と周囲との孤絶感 小
説は個の苦痛の表現

3	バルザック『従兄ボンス』……………	三
	人間の金銭欲のすさまじさ	
	十九世紀ロマンの代表作 おとなのための小説 収集家ボンス 心美	
	しきものへの告白	
4	スタンダール『バルムの僧院』……………	三〇
	情熱によって行動する人間のけだかさ	
	ナポレオン時代のあとで 生の理想を描く大長篇 清純と背中合せの背	
	徳 時間と空間の充溢とひろがり	
5	トルストイ『戦争と平和』……………	三六
	歴史を巨大な日常として	
	文学の常識にさからう 全体小説の創始 統一された生への信仰 さ	
	ながら神のように語る	
6	ドストエフスキー『罪と罰』……………	四六
	神を見失った現代人の運命	
	トルストイへの不満 新しい時代の根本的な不幸 革命思想とラスコー	
	リニコフの信念 聖なる小さきものを	

7 オースティン『自負と偏見』…………… 五七

結婚へのリアルな観察

女の暮しのなかから ベネット家の娘たち 結婚にあらわれる人間の分
別 オースティンの(日常)

8 ロレンス『息子と恋人』…………… 六六

男女の永遠のたたかい

生の門出での経験 母親と子どもたち フロイト的なテーマ 自然の
神秘さと自我の存在

9 トマス・ウルフ『天使よ故郷を見よ』…………… 七五

見知らぬ世界への渇き

感覚とイメージの氾濫 揺り籠の中の風景から ヴィジョンにつかれた
人間 動きという強迫観念

10 フォークナー『響きと怒り』…………… 八四

過去に呪縛された人びと

前衛的な手法の試み 作家自身の課題とかわる コンブソン家崩壊の
物語 人間は風土的伝統の総和

セルバンテス『ドン・キホーテ』……………	九三
----------------------	----

狂気のかたちをとった理想

騎士道物語への批判 ドストエフスキーの評価 “正気のきちがい”
夢が現実にかみくだかれるしくみ

チエーホフ『黒衣の僧』……………	一〇一
------------------	-----

“知”が要求する代償

読者と作品との間の秘めやかな関係 白髪 of 修道僧との問答 コヴリン
の離婚と死 悲哀と戦慄の印象

II

13 ギュンター・グラス『猫と鼠』……………	一一三
---------------------------	-----

戦争で消えた友への鎮魂歌

第二次大戦後の文学を対象に ナチ体制下の青春 道化師を夢みる少年
みじめさの中の人間的栄光

14	フリップ・ロス『狂信者イーライ』……………	三三
----	-----------------------	----

ユダヤ人自身の反撥と吸引

ロスのいくつかの作品 アメリカのユダヤ人社会 弁護士イーライの発
狂 不定の場所への宙吊り

15	ソール・ペロウ『犠牲者』……………	三三
----	-------------------	----

被害妄想の悪夢

現代アメリカの知識人文学 ユダヤ人レヴィンサール つきまとうオー
ルビー 自己認識の切実さ

16	アラン・シリトー『屑屋の娘』……………	四〇
----	---------------------	----

庶民のなかの“生”の瞬間

イギリスの労働者作家 シリトーの選訳 非行少年の日常 ドリスの
異様な美しさ

17	マルグリット・デュラス『ラホールの副領事』……………	四九
----	----------------------------	----

アジア的自然への求愛

現代小説が難解な理由 ジャン＝マルク・ド・Hの謎 ガンジス河のは
とりの女乞食 西欧的な愛を無意味にする存在

18	アルベルト・モラヴィア『軽蔑』……………	一六
----	----------------------	----

社会の構造に制約された愛の悲哀

若いジャーナリストの妻 主人公の和解の試み 受動的な愛のありよう
 文明人的な心理のせんさく

19	アイリス・マードック『切られた首』……………	一七
----	------------------------	----

現代人の愛の荒野

イギリス人らしい作風 掟をもたぬ自由人・ギボン 妻アントウニアの
 理屈 愛の不毛を超えるもの

20	ソルジェニーツイン『マトリョーナの家』……………	一八
----	--------------------------	----

権力は民衆の日常を奪えない

ユニークな文学的本質 共同性の思想 西欧文学との違和感 生き続
 けるロシアの精神 書き出しの奇妙な感動 古いロシア気質の農民
 老婆マトリョーナの心 自分が立つべき大地

21	ギマランエス・ローザ『大いなる奥地』……………	一九
----	-------------------------	----

生の「隠された小道」にわけ入る

活力に富むラテンアメリカ文学 ノルデステ地方を舞台に 男装の少女

との恋物語 作者の象徴的な意図

22	ホセ・ドノソ『夜のみだらな鳥』……………	101
----	----------------------	-----

ひき裂かれた存在感覚

文学方法の冒険	寺男の夢魔的な世界	主人公につくらせた小説	魔
女伝説のモチーフ			

23	アレホ・カルペンティエール『失われた足跡』……………	111
----	----------------------------	-----

高度の都市文明への問いかけ

ラテンアメリカの再発見	大陸のもつさまざまな時間	情人ムーチエと
ロサリオ	秘められた幻境での体験	

作家略歴……………	121
-----------	-----

翻訳書一覧……………	126
------------	-----

あとがき……………	127
-----------	-----

*作家顔写真提供／集英社 筑摩書房 フランス大使館

I

1 トーマス・マン『トニオ・クレーゲル』

*

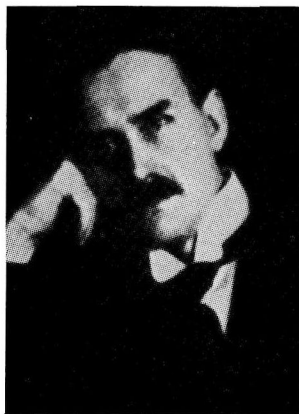
自分にひそむかたよりの感覚

なぜ手紙を書くか

R：へ。このあいだ久しぶりにおまえと話をしてみても、おまえがヨーロッパの古典的な名作などを、そろそろ読もうという歳頃になっていることに気づいた。そのとき私は、自分がはたちくらの頃、妹がひとりあればと考えていたことを思い出した。

なぜかといえば、もし妹がいれば、その子に文学について読書案内がしてやれるからだ。私はその頃療養所にいた。だからその案内は手紙のかたちをとるのだが、とにかくそろそろ本など読むようになった妹に、毎週手紙を書いて、ヨーロッパ文学について自分の知っているかぎり、感じとったかぎりのことを伝えてやれたら、どんなにか楽しかろうと私は考えていたわけだ。つまり私は誰かに文学教育をほどこしたくてたまらず、いかにも感傷を抜けきらぬはたちの青年にふさわしく、その対象としてかわいい女の子などを夢みていたことになる。

* ————— *



トーマス・マン

かったのだろう。

だがいま思えば、私がそういうふうな文学教育熱にうかされていた根本の理由は、文学というものを、人間が人間として形成されるうえで非常に大切な働きをするもの、あえていえば不可欠なものとして考えていたからにちがいない。

おまえのようなひとりまえの娘の父親になってしまったいまの私は、もう文学というものをそんなふうには考えていない。ひとくちに言って、いまの私は文学というものを、それがいいことだか悪いことかはわからないが、どうしようもなくひとが出会ってしまうもの、といったふうに考えているらしい。

それにしても、なぜ文学教育などをひとにほどこしたかったのか。それはひとつには、私が十四くらいから文学、それもとりわけヨーロッパの近代文学に心をとらえられていたので、もうこの頃には、それについてひととおりの観念が出来上っていて、青年特有の向う見ずから、自分がよく知ってもおり愛している事柄について、誰かに知識をわかち与えたくてたまらな

おまえはこのあいだ、私の友だちに、父親と話ができる時間が少ないと嘆いていたそうだ。おまえには、この頃自分に見えてきた学問や芸術の世界について、この私と話を交わしたいことがあるのだろうか。あるいはおまえの歳頃では、そういういわば二次的な世界より、自分の青春から生じてくるもっとなまなことがらが痛切な問題なのだろうか。いずれにせよ、私がおまえにこんな手紙を書く気になったのは、友人からそんなおまえの言葉を聞かされたからにちがいない。

私はおまえとほぼおなじくらいの歳の娘さんたちに、一年間世界文学の話をしなければならぬことになった。その娘さんたちは看護婦になるための勉強をしている人たちだ。妹がいればなあと思っていた頃の私なら、大いにはりきって古典名作の解説を書いたのだろうけれど、いまの私にはとまどいがある。教養としての世界文学の知識が、その娘さんたちの実際の青春と、どんな関係があるのかと疑うからだ。

いろいろ思いまどったすえに、R：、私はおまえに手紙を書けばいいのだと気づいた。おまえに私と話をしたいきもちがあるのは、じぶんの親父とはどんな人間なんだろうという好奇心なのかも知れない。私はおまえに、若い頃から愛して来た世界文学の作品のなかからいくつか選んで、私がそれをどんなふう読んで来たかを話そう。そういういくつかの作品に心ひかれたことが、そのままだ私が生きて来たことと同じ意味だとわかってもらおう。私がおまえに話せるのはそんなことだけ

だし、またそれがおまえとおなじ歳頃の娘さんたちへの、私の書きうるいちばんましな世界文学案内になるはずだ。

妹に文学教育をほどこしたいと思っていた頃の私は、文学を半分くらい教養のように考えていたらしい。だがその頃でも、私はほんとうにはわかっていたはずだ、文学とはひとつにとって苦痛とおなじ意味をもっているということ。でなければ十八の私が、あんなに『トニオ・クレীগエル』という小説を愛したはずはない。

トニオ少年の宿命

これはトーマス・マンというドイツ人の小説家が、一九〇三年に発表した短篇小説だ。短篇といったらそうとうに長い。いったいにヨーロッパ文学という短篇（ノヴェル）とは、日本の場合よりずっと長いもので、長篇（ロマン）となれば、それこそええんと長いのがふつうなのだと承知しておいてほしい。また一九〇三年が明治三十六年、つまり日露戦争の前年になることも注意しておいてよいだろう。このときマンは二十七歳だった。

この小説は音楽にたとえれば三楽章からなっていて、トニオの少年時代がその第一楽章にあっている。そこは北ドイツの中世風な小都市で、トニオの生家は穀物を商なう豪商である。この町に